

形代としての浮舟に見る神道と仏教

——『源氏物語』宿木卷における薫と中の君の会話から——

方 国 花

一 はじめに

『源氏物語』は周知の通り、ゆかりの物語である。男たちが次々とゆかりを探し求めていくことで物語は展開していく。正編では男が一方的にゆかりを探し求めるのに対し、続編の『宇治十帖』では女が男にゆかりを差し出すという形⁽¹⁾になっている。『宇治十帖』の女主人公である浮舟は登場する前から人形と呼ばれ、異母兄弟である中の君は自分や大君の身代わりとして浮舟を薫に差し出す。その時の薫と中の君の交わした会話をみてみよう（宿木卷⁽²⁾。下線は筆者が入れた。以下同じ）。

薫「思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形⁽³⁾をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへなりにたる」とのたまへば、中の君「あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求むる絵師もこそなど、うしろ

めたくぞはべるや」とのたまへば……

薫が最初言った「人形」は大君を供養するための像のことで、「寺」や「行ひ」など仏教用語から仏教的意味で使われていると理解できるが、中の君は神道的意味合いを持つ祓えの具である「人形（ひとかた）」にすり替えている。この会話文は浮舟を登場させる前触れになっていて、浮舟の身代わり人生の発端でもある。人形と呼ばれて登場した浮舟は「形代」「撫で物」とも呼ばれ、最後は宇治川に身を投げて身代わり人生に終止符をうつ。しかし、彼女は仏教を振り所にして再生する。

この会話文は、浮舟の運命や物語における位置づけを決める一つのポイントになるだけでなく、仏教と神道の宗教的一面も反映しているように思われる。しかし、今までこの歌を特別に取り上げて論述したものはない。そこで、本稿では宿木における薫と中の君のこの会話を取り上げることによって、女主人公浮舟の身代わり人生を考察した上で、宗教的側面における解釈を試みる。

二 従来の身代わり説話との比較

誰かが誰かの身代わりになるという身代わり説話は、『古事記』や『日本書紀』など古代の文学作品から中世、近世までの多くの文学作品に見られる。その中でも『源氏物語』は物語の始めから終りまでずっと身代わりを探すという形で物語が展開していき、身代わり説話の典型的な例とも言えよう。本章では、『源氏物語』の前の作品、例えば、『古事記』や『日本書紀』、『宇津保物語』などに見える身代わり説話の例を挙げ、『源氏物語』の続編である「宇治十帖」の女主人公浮舟の場合はこれらの作品と比べて、どのような共通点・相違点が見られるかについて述べていきたいと思う。結

論から先に述べると、浮舟の人生自体、身代わり人生であり、従来の身代わり説話と多くの共通点を見せながらも、独創的な部分を持っている。

まず、『日本書紀』¹を見ると、巻一〇の「応神天皇九年条」⁵に、武内宿禰にまつわる身代わりの話が記載されている。

時に、武内宿禰が弟甘美内宿禰、兄を廢てむと欲ひ、即ち天皇に讒言さく、「武内宿禰、常に天下を望ふ情有り。今し聞かく、筑紫に在りて、密に謀りて曰く、『独り筑紫を裂き、三韓を招きて己に朝はしめ、遂に天下を有たむ。』といふときく」とまをす。是に天皇、則ち使を遣して、武内宿禰を殺さしむ。時に、武内宿禰嘆きて曰く、「吾元より忒心無し。忠を以ちて君に事へけるを、今し何の禍ぞも、罪無くして死らむや」といふ。是に、壹伎直が祖真根子といふ者有り。其の為人、能く武内宿禰の形に似れり。独り武内宿禰の、罪無くして空しく死らむことを惜み、便ち武内宿禰に語りて曰く、「今し大臣、忠を以ちて君に事へ、既に黒心無きことは、天下共に知れり。願はくは、密に避りて朝に参赴き、親ら罪無きことを弁めて、後に死るとも晩からじ。且、時人毎に云はく、『僕が形、大臣に似れり』』といふ。故、今し我、大臣に代りて死りて、大臣の丹心を明さむ」といひ、則ち劍に伏して自ら死りぬ。

武内宿禰を没落させようと弟である甘美宿禰は応神天皇に武内宿禰が筑紫で謀反を企んでいると讒言し、応神天皇は武内宿禰を殺すための使者を遣わした。その時、武内宿禰の臣下である壹伎直の祖真根子が、「僕が形、大臣に似れり」と自分の姿は大臣に似ているからと言って武内宿禰の身代わりとなって死んでいった。この場合、真根子は武内宿禰に似ているからこそ彼の身代わりになれたと考えられる。この身代わり説話は、大君に酷似するという容貌から大君の身代わりになって登場する浮舟の場合と共通する点がある。即ち、二つの物語には「似ている」という要素が入っている点で共通する。

次に、『日本書紀』巻二四の「皇極天皇三年」の条をみると、蘇我倉山田石川麻呂の長女が中大兄皇子に嫁ぐことになつ

だが、約束の夜、一族の男に奪われてしまい、やむなくその妹を代わりに中大兄皇子に奉ったという記述がある。

是に中臣鎌子連、議りて曰さく、「大事を謀るには、輔有るには如かず。請はくは、蘇我倉山田石川麻呂の長女を納れて妃として、婚姻の昵を成しまさむことを。然る後に陳説きて、与に事を計らむと欲ふ。功を成す路、茲より近きは莫からむ」とまをす。中大兄、聞きて大きに悦び、曲に議る所に従ひたまふ。中臣鎌子連、即ち自ら往きて媒要び訖りぬ。而るに長女、所期りし夜に、族に偷まれぬ。族は身狭臣を謂ふ。是に由りて、倉山田臣、憂へ惶り仰ぎ臥して所為を知らず。少女、父の憂へ惶るを怪しびて、就きて問ひて曰く、「憂へ悔ること何ぞ」といふ。父、其の由を陳ぶ。少女の曰く、「願はくはな憂へたまひそ。我を以ちて奉進りたまふとも、亦復晩からじ」といふ。父、便ち大きに悦び遂に其の女を進る。

この身代わり説話は、妹が身代わりになるという点で、浮舟の場合と共通点を持つ。異母姉妹ではあるが、浮舟は大君の妹であり、また中の君の妹でもある。大君死後、薫は中の君を大君の身代わりとして近づいたが得られず、苦しんでいる時に中の君が薫の思慕から逃れるために大君と自分の身代わりとして浮舟を差し出した。ここでは、共に妹が身代わりになっているのである。

これだけではない。中の君は一人の人間ではなく禊ぎや祓えの具である「人形」と言つて浮舟を差し出したのである。⁶⁾これは、山背大兄が馬の骨を身代わりにしたとの記述と似ている。『日本書紀』巻第二四の「皇極天皇二年」条に、「山背大兄、仍りて馬の骨を取り、内寝に投げ置き、遂に其の妃並に子弟等を率て、間を得て逃げ出でて、膽駒山に隠れたまふ。」という記述が見える。これは、山背大兄が蘇我入鹿配下の兵に追い詰められた際の記述で、追い掛けてきた兵達が斑鳩宮を焼いたので、自分の骨に見せかけるため、山背大兄は馬の骨を身代わりにし、兵達に灰の中にあつた馬の骨を自分の死体と思わせた。それで、山背大兄一家は逃げ切ることができたのである。この馬の骨を身代わりにした話は、浮舟の場合と似ていないように見えるが、人間ではなく物を身代わりにするという点で相通じる。浮舟は登場

する前から「人形」と呼ばれたが、この「人形」は袂ぎや祓えの時に穢れを移して水に流す人の形をした物であり、「物」として身代わりになる点で「馬の骨」となんらの違いもない。

ところで、物扱いでできるのも浮舟の身分が低いからであろう。「源氏物語」が強く影響されているとされる『宇津保物語』の「藤原の君」⁷巻に、身分の低い家人の娘を身代わりに差し出したという話が載っている。

（上野宮の貴宮掠奪の計画）かかることを、大将のおとど聞きて笑ひたまふこと限りなし。正頼「われをはかなしと思して、謀りたまはむと思すなり。何かは謀られたてまつらむかし」とて、和政の少将に、正頼「道隆寺に、上野の親王の、大いなるわざし給ふなるを、政所の男どもやりて、ところ取らせよ。若き子どもやりて、もの見せむ」とのたまふ。

少将、御寺に行きて、御前所取らす。宮の男ども、「わが宮の御ために疎かにいますがる殿には、なでふところか取らすべき」といへば、少将、和政「ただ御車一つばかりなり。中のおとどの姫君の、『おもしろかるべきことなり。見たまはむ』と聞こえ給へばぞ」といへば、宮の男「よし、仇は徳をもちて、とぞいふなる」とて、取らせつ。

その日になりて、おとど下臈、任うまつる人の娘、年若く、かたち清げなるを召して、装束いとよくせさせたまひて、舍人の娘、大人二人、童一人は樵夫の娘なりけり、黄金造りの車一つ、檳榔毛の車二つ、黄金造りには、下臈の娘、大人、童を乗せ、檳榔毛には、殿の御達乗せて出で立つ。正頼「あてこそその御徳に、この人の、かの君の御妻にてあらむことよ。ただ人のよきにはまさりなむかし。ゆめ気色見すな。あてこそその御正身と思ひなしてあれ」とのたまふ。

上野の宮が、道隆寺の塔供養に託けて正頼一家を誘き出し、そこで貴宮を奪い取ろうとするが、正頼はこの計画を知って、身分の低い家人の娘のうち特に若くて美しい一人を選んで、立派な衣裳に着替えさせ、貴宮の代りに黄金造りの車に乗せて侍女たちと一緒に道隆寺に向かわせた。上野の宮の下のものたちは、家人の娘を貴宮と思い込んで奪い去るのである。

この話において、正頼は家人の娘という身分の低い人を自分の娘の身代わりにした。身分の低い者を身代わりに出すという点で、浮舟の場合も同じである。身分が低いからこそ身代わりにできる。また、「人形」のような物扱いもできるのである。

浮舟は襖ぎや祓えの際に水に流される「人形」のように、浮舟も宇治川に身を投げてしまふ。このような入水談は「古事記」⁽⁸⁾にも見え、「倭建命の東国征伐」条に、弟橘比売命が倭建命の身代わりとなって入水する記述がある。

其より入り幸して、走水海を渡りし時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻せば、進み渡ること得ず。爾くして、其の后、名は弟橘比売命、白ししく、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。海に入らむとする時に、菅置八重・皮置八重・純置八重を以て、波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪、自ら伏きて、御船、進むこと得たり。

倭建命が東征の任務を果たすために船に乗って相模から東へ進む際、海峡を支配する神が怒って大波を立て先へ進むことができなくなつた。この時、その後の弟橘比売命が神の怒りをしずめるために、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ」と言つて、倭建命の身代わりとなつて海に入った。するとその恐ろしい荒波も自然に静かになつて、船は対岸に進むことができた。弟橘比売命が身代わりとなつて入水した話は、身代わり人生を送つたあげく入水した浮舟の話と類似する。

このように、大君、中の君の身代わりとして登場した浮舟は、従来の身代わり説話と比較すると、「似ている」「妹である」「物扱いされる」「身分が低い」「入水」という多くの共通要素を持っている。つまり、浮舟は物語に登場してから身代わり人生の最後になる「入水」というところまで従来の身代わり説話と多くの共通点を持っている。しかし、「宇治十帖」は浮舟が入水したところで終わるのではなく、彼女を人格のある人として再び登場させる。再生した浮舟

はもはや誰かの身代わりではなく、自分の人生を自分の意思で決めようとする。よって、「宇治十帖」における浮舟の物語は、従来の身代わり説話と多くの共通点を持ちながらも、再生という点で特異性を持つと指摘できよう。次に、浮舟の身代わり人生についても少し詳しくみていくことにしよう。

三 浮舟の身代わり人生

大君に生き写しの浮舟は、大君死後、彼女の身代わりとして物語に登場する。浮舟が登場する前から、亡き大君への思慕を断ち切ることでできない薫は身代わりとなるものを探し求めていた。その具体的出発点となるものは久富木原玲氏の以下の説から窺い知ることができる。⁹⁾

さらに薫は「昔の御形見に、今は何ことも聞こえ」云々と中の君に訴えるが、彼は以前にも大君をしのぶよすがとして「かのたまひしやうにて形見にも見るべかりけるものを」とも述べて形見に執着することに注目したい。「脱ぎ置く衣」を翁に、また「不死の薬」を帝にそれぞれ残していったかぐや姫に比して、思い出の品をなにとつ与えてはくれなかった大君のあり方が浮かび上つてこよう。大君の形見としての人形を求めずにはいられない薫の行動も、こうした『竹取物語』との緊張関係から生ずる磁力に引き寄せられているといえないだろうか。

「大君の形見としての人形を求めずにはいられない薫」は、何か「思い出の品」になるようなものがあつたらよかったものを、何もなかったので、その寂しさから逃れるために、最初は中の君を大君の形見、または身代わりと思つて近づくが、既に匂宮邸に引き取られて結婚生活を送っている中の君を困らせるだけである。中の君も得られないと分かっ

た薫は、亡き大君そっくりの「人形」、即ち像を造り、また絵にも描きとつて、供養の行をしようとの君に相談する。薫が、「思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる、人形も作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへなりにたる」と言うのに対し、中の君は、「あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ」と答える。この会話を解釈したものに、志賀あずさ氏の論述があるので、以下に引用する。¹⁰⁾

ゆきづまる薫は、己を解放する場を「おとなしの里」と表現してその苦悩を中の君に訴える。古今六帖の、恋ひわびぬ音をだに泣かむ声立てていづれなるらむ音無しの里

を響かせて、せめて声を立てて泣いてもよい場所がほしいということだろう。……だが、少なくともしがらみだらけの都にはそんな場所はなかった。となれば、薫の視線はやはり、恋しい人の住んでいた宇治へと向かう。あの山里で「むかしおぼゆる人形」「絵」を安置して勤行できたらというのである。都で思うように実行できぬこの行為は、薫にとつては最低限の心のやり場である。この「人形」という言葉が、薫を新たな局面に直面させることになる。彼は「人形」を単なる大君そっくりの像の意味のつもりで口にしたのだが、中の君はそれを「うたて御手洗川近き心地する人形」と言い換えてしまう。会話上の機知としての言い換えが、「人形のついでに」と不吉な色合いを背負わせた書き方で浮舟を引き出すことになってしまふのである。

この解釈から分かるように、薫は「人形」をただ大君そっくりの像という意味で言ったのに対し、中の君は御手洗川で褌ぎや祓えをする「人形（ひとかた）」にすり替えている。これを志賀氏は「会話上の機知」としている。また、藤井貞和氏は「会話上の機知としての一種の曲解¹¹⁾」として「曲解」を付け加えている。この「曲解」は、物語において非常に重要な箇所であり、浮舟の運命を決め付ける重要なポイントでもある。中の君がこの曲解を用いた意図は、薫から

度々恋情を訴えられ、彼の興味を自分から逸らしたいからである。¹² そのためには大君の身代わり「人形」が必要であるが、浮舟は大君と非常に似ていて、妹でありながら身分は低く、物扱いも可能な上、入水という運命を与えられる「人形」として最適存在であり、大君の身代りだったのである。

浮舟はその登場前からすでに「人形」の如く川に流されることを運命づけられていた。その発端となるのが中の君の会話文における「曲解」である。つまり、曲解によって「人形」の意味が変わり、またそれによって浮舟の運命も決められる。「人形」と呼ばれて登場する浮舟は、その後、「形代」「撫で物」とも呼ばれ、不吉なイメージが増していく。そして、最後は本物の「人形」のように宇治川に身を投げるのだが、観音に守られ生まれ変わる。再生した浮舟はもはや大君の身代わりでも中の君の身代わりでもなく、「人形」「形代」「撫で物」でもなくなる。出家して仏教を抛り所にし、新しい人生を歩むのである。

このように、薫が仏教的行いをしようとして言い出した「人形」を、中の君が神道的意味合いを持つ襦ぎや祓えの「人形」ととりなし、「人形のついでに」思い出したといつて、浮舟の存在を薫に知らせる。よって、中の君の曲解は、浮舟の運命を決め付ける役割をするだけでなく、浮舟を物語に引き出す役割もしていると見えよう。

「人形」と呼ばれて登場した浮舟は、「形代」「撫で物」とも呼ばれ、水に流される「祓えの具」という存在に一歩一歩近づいていき、最後は本当に入水する。「人形」「形代」「撫で物」というのは、周知の通り、神道に関連するもので、入水するまでの浮舟の人生もまた神道と深くかかわっていると見えよう。しかし、再生後の浮舟は仏教を抛り所にして生きていく。即ち、浮舟の人生は再生前と再生後で大きく変わっているが、それは神道から仏教への変化で捉えられると思われる。浮舟の人生だけでなく、彼女の登場を仄めかす中の君の曲解も神道と仏教で捉えることができるのではなかろうか。

四 神仏習合から見た薫と浮舟

浮舟の人生を論じる前に、少し寄り道をして、『源氏物語』やその前の文学作品における宗教観についてみてみよう。岡村孝子氏は、国家形成における神事と仏事の役割について次のように述べている。¹³⁾

国家形成の柱となったものは神祇信仰であった。それは律令法制定以前からの国家形成の歴史的経緯からみて必然でもあ
るわけだが、『続日本紀』から文武朝・元明朝・元正朝における国家的祈願を見ると、ほとんどが神祇においてであり、
祈雨祈願である。仏教の受容においても、この時期は神祇の補完として祓う（攘う）効力や、神明の加護的効験（鎮護国
家）の期待が感じられる。仏教受容の画期は聖武朝だが、国家的祈願では一時的なものが見られ、聖武朝は早や飢饉、疫
病の流行等により政治的困難を極めていたので、光明皇后の仏教帰依や留学僧玄奘による一切経の請来もあり、聖武天皇
は光明皇后とともに仏教の功德によつて困難を乗り越えようとしていたと見られる。

即ち、七、八世紀における古代日本社会で神道と仏教はお互いに補完する存在であったとみることができると言換え
ると、この時代には既に神道と仏教が共存していた。

また、『続日本紀』天平神護元年（七六五）条に、出家した称徳天皇が大嘗祭を主催し、太政大臣禪師の道鏡を列席
させたのを、神の立場から忌避する意見を申し立てたのに対し、女帝は仏法を護り尊ぶのが神々の本意であるとして神々
を仏法から隔離する必要はないと主張したという例が見え、この例からも日本の固有信仰である神道と仏教が同時に存
在していたことが見て取れる。

筆者はこのような神道と仏教の共存の例が正に神仏習合ではないかと考える。古代から始まった神仏習合は、平安時

代の文学作品である『源氏物語』にも反映されている。入道（明石入道）は出家者でありながら住吉明神をも信仰したという例¹⁴が正にそれである。

また、天照大神や天皇家の祖霊といった性格を帯びている六条御息所と桐壺院の霊に対して共に法華八講が催される例からは、仏教と日本の神との亀裂ないしはせめぎあい¹⁵がくつきりと浮かび上がる。これは仏教と日本の神との混在があるからこそ、対立も可能だとみることもできよう。

神仏習合について、久富木原氏は「神仏習合の時代ではあるが、仏には来世を祈り、神には現世のことを祈るという感覚があったものと思われる¹⁶」と指摘する。この説に関しては筆者も賛成で、「宇治十帖」の主人公である薫や浮舟にもそのような一面が見られるのではないかと思う。

薫は出生の秘密によって生まれる憂愁からの救いの手段として、現世とは別の価値、仏道を選んだ¹⁷。その際、同じ価値観を持つ八の宮に出会い、意気投合する。また大君にも出会って、彼女に強く引かれていくが、大君は早くも死んでしまう。最愛の人をなくしてしまった薫は、大君そっくりの像——「人形」——を作り、勤行しようとする。ここからも薫の道心を窺い知ることができる。

しかし、中の君は薫の言った「人形」を禊ぎや祓えに使う神道的意味合いを持つ「ひとかた」にすり替えた後、「人形のついでに、いとあやしく、思ひよるまじきことをこそ思ひ出ではべれ」と言って、大君に生き写しの浮舟の存在を薫に知らせる。しかし、仏教的行いをしようとした薫は、何の抵抗もなく中の君の言った言葉をそのまま受けとってしまふ。それだけでなく、「……」などか、今まで、かくもかすめさせたまはざらん（宿木巻）と言って、なぜもつと早く教えてくれなかったかと非難さえる。また、「さて、もののついでに、かの形代のこと言ひ出で給へり」（宿木巻）と言って、自ら浮舟に「形代」という語を充てる。「形代」も水に流される祓えの具であり、中の君の言った「人形」と同義である。道心深かった薫は宇治に寺を建て、大君を模った像、即ち「人形」を作って供養しようとしたが、中の君の影響・浮舟の出現により、心の中に神道的なものが芽生え始め、自ら神の行事に用いる「形代」という語を用いるよ

うになった。

このようにみた時、薫のなかにも「仏には来世を祈り、神には現世のことを祈る」ということが当てはまる。出生の秘密からの苦悩や憂愁から逃れるために「現世とは別の価値」、即ち「来世」的なものを求めていたのが、大君に会ってからは恋の悩みのほうが大きくなる。恋は現世のもので、恋の悩みを祓うためには神に祈り、神を抛り所にし始めたと見ることが出来る。即ち、「神には現世のことを祈る」ということである。その裏づけとなるのが、中の君の「御手洗川近き心地する人形」という浮舟を仄めかす言葉以降、自ら神道に関わる「人形」「形代」「撫で物」という用語を使ったということである。薫の中には仏教から神道へという大きな変化が生じたのである。その転換点となるのが「はじめに」に引用した薫と中の君の会話文である。

その会話文をもう一度振り返ってみると、薫が「寺」「行ひ」など仏教用語とともに仏像風の彫刻物という意味で「人形」と言ったのに対し、中の君は「御手洗川近き心地する人形」と言つて、御手洗川に流す祓えの具という意味の「人形」にすりかえている。したがって、中の君の「会話上の機知」としての「曲解」は、仏教行事における「人形」を神道の行事に用いる「人形（ひとかた）」にとりなした「曲解」とも解釈できるように思われる。仏教用語を神道の用語にとりなした中の君の言葉、この言葉は浮舟の登場を知らせるキーワードでもある。その後、浮舟を指し示す言葉は「形代」「撫で物」へと入水に近づいていく。周知の通り、「人形」「形代」「撫で物」は穢れを移して海や川などに流す神道の行事における「祓えの具」であるが、「祓えの具」と呼ばれ、人格を与えられていない浮舟は、薫と匂宮の恋に悩まされ、自ら祓えをしたいと言ひ出す。

なやましげにて瘦せたまへるを、乳母にも言ひて、さるべき御祈祷などせさせたまへ、祭、祓などもすべきやうなど言ふ。御手洗川に禊せまほしげなるを、かくも知らでよろづに言ひ騒ぐ（浮舟巻）。

久富木原氏はこの箇所を『伊勢物語』の六五段の「陰陽師、神巫よびて、恋せじといふ祓の具してなむいきける」という本文と「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」という歌との関連性が認められるとし、

浮舟の具合が悪そうなので、周囲が心配して「禊、祓などもすべき」と騒いでいるのだが、浮舟は「恋せじ」と御手洗川に禊をしたいほどだと思っている。この禊は浮舟その人の願望としてある。六五段では昔男自身が禊をした。そしてここでは浮舟自身が禊をしたいと強く思っていることに注目したい。

と述べている。⑮ 自らが「祓えの具」でありながら、祓えをしたいというのである。現世の恋の悩みを取り除くために祓えをしようとする行為は、正に「神には現世のことを祈る」ことである。

ところが、浮舟は祓えなどできずに、運命の導かれるまま入水してしまう。まさしく「祓えの具」のように宇治川に身を投げてしまったのである。ここで大君の身代わりとしての人生は幕をおろす。しかし、物語はここで終わらない。浮舟は横川の僧都に助けられ蘇った。身代わり人生から脱出し、もはや「人形」「形代」「撫で物」などの「祓えの具」と呼ばれなくなる。浮舟は僧都の祈祷によって生き返ったわけだが、取り付いていた物の怪の言葉に注目したい。「されど観音とざまかうざまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。」(手習巻)という言葉からすると、浮舟には観音の守りがあったので死ぬことができなかつたことが分かる。浮舟の再生には横川の僧都と観音の守りなど仏教の保護が大きく働いている。浮舟は仏教を拠り所にして人格のある人に生まれ変わったが、これは「祓えの具」にされ、恋に悩んで祓えをしたいという「現世」(再生前の人生)的なものとは違って、「来世」的なものと見られるのではなからうか。このように見たとき、浮舟の人生もやはり「仏には来世を祈り、神には現世のことを祈る」ということが言えよう。⑯

このように、「宇治十帖」の男主人公である薫と女主人公である浮舟には、共通して仏には来世、神には現世を祈る

という仏教と神道の両面的性格が見られる。薫の場合は仏教から神道へ、浮舟の場合は神道から仏教へというように、順序こそ異なるが、神仏習合で時代性を反映する面では共通するのである。

五 おわりに

以上、浮舟の身代わり人生を従来の身代わり説話と比較した上で、浮舟の一生を神道と仏教の関係で考察してみた。浮舟と薫に関しても、久富木原氏の指摘したように、「仏には来世を祈り、神には現世のことを祈る」というのが言えることを確認した。この点については現代も同じである。現代の日本人は子供の宮参り、結婚式など現世の行事においては神に祈り、葬式など来世に関する行事は仏に祈る傾向がある。

「はじめに」に引用した薫と中の君の会話は、浮舟の登場の前触れになっていて、彼女の運命を決定する重要な箇所であり、薫の道心の転換点でもある。また、ここからは仏教から神道への「曲解」も見て取れるように思われ、神仏習合を如実に反映した箇所でもあろう。今までこの箇所はあまり注目されてこなかったが、このようにみた時、「宇治十帖」においてどれだけ重要な位置にあるかが容易に想像できよう。

中の君の「曲解」によって浮舟の「人形」としての生活が始まり、神道の祓えの具の如く入水するが、仏教を抛り所として生き返る。しかし、一見仏教に救われ、身代わり人生を終えたように見えるが、浮舟は再生後も妹尼の娘の身代わりにされ、髪の毛も還俗できるような長さにし、俗世間の人達に度々訪ねられる。よって、完全に仏教に救われ、現世と関係を断ち切ったと言えないのではなからうか。浮舟は「現世」と「来世」的な「神道」と「仏教」の間で彷徨い、模索する形で物語は終わっている。

※本稿は、久富木原玲先生の大学院の授業を一年間受講して、その際に気づいたことについて先生のご指導を受けながら書いたものです。この場を借りて、久富木原先生に深くお礼申し上げます。

注

- (1) 久富木原玲「浮舟—女の物語へ—」『人物で読む源氏物語』第二〇巻—浮舟、勉誠出版、二〇〇六年、二六〇—二七〇頁
- (2) 『源氏物語』の本文は新編日本古典文学全集による（以下同じ）。
- (3) 身代わり説話については、神山重彦「身代り説話とその周辺」〔山形大学紀要〕第十卷第四号一九八五年、三九—六九頁に詳しく、古代から近世までの事例、また外国の事例を数多く紹介している。
- (4) 『日本書紀』の本文は新編日本古典文学全集による（以下同じ）。
- (5) この身代わりの話は久富木原玲氏の教示による。
- (6) 薫が大君そっくりの像を造り供養したいと言ったのに対し、中の君は祓えなどに使う「人形」にすりかえ、浮舟をその「人形」として登場させた。その本文は「一 はじめに」に引用した通りで、詳しい解釈は後述する。
- (7) 『宇津保物語』の本文は新編日本古典文学全集による（ただし、引用に際しては適宜表記を変えた箇所がある）。
- (8) 『古事記』の本文は新編日本古典文学全集による。
- (9) 久富木原玲「天界を恋うる姫君たち—大君・浮舟物語と竹取物語—」『源氏物語 歌と呪性』若草書房、一九九七年、一三五頁
- (10) 志賀あずさ「中の君と薫—浮舟登場への流れ—」『源氏物語の研究—薫と浮舟、その生—』東京女子大学日本文学科、二〇〇二年、八〇—八一頁
- (11) 藤井貞和「『人形』の意味複合」『源氏物語論』岩波書店、二〇〇〇年、四六七頁
- (12) 志賀あずさ前掲書注(10)、八一頁。東原伸明「召人浮舟入水と続編の物語主題—身代りの（生）の反復と離脱—」『高知女子大学文化論叢』第八号、二〇〇六年、一一—一一頁
- (13) 岡村孝子「第二章 天武皇統の神祇信仰と仏教の受容」『古代神祇信仰と仏教—宇佐八幡宮の成立』思文閣出版、二〇〇五年、七七頁

(14) 久富木原玲「平安和歌における神と仏―袋草紙「希代の歌」を手がかりに」『王朝文学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎、二〇〇七年、二二四―二四四頁

(15) 久富木原玲「源氏物語と法華経―六条御息所の罪へ」『源氏物語 歌と呪性』若草書房、一九九七年、三三二―三三三頁

(16) 久富木原玲前掲論文、注⁽¹⁴⁾

(17) 志賀あずさ「受けとめられぬ「言葉」―道心の始め」前掲書注⁽¹⁰⁾、一三一―一三三頁

(18) 久富木原玲「浮舟の和歌―伊勢物語の喚起するもの―」池田節子他二人編『源氏物語の歌と人物』翰林書房、二〇〇九年、二四七―二六四頁

(19) しかし、宿木巻と東屋巻には浮舟が初瀬の観音に参拝することが書かれていて、仏に現世のことを祈っているように見えるが、これは高貴な血筋を持つ娘を上流階級に入れ、貴族とのよき縁談を望む母中将の君の願いであり、浮舟自身の願いではないと思われる。